

科研費・基盤研究A「天文学との連携にもとづく考古学・考古史学研究法の構築」(19H00544)
の「日本固有の星名に関するフィールド調査・瀬戸内沿岸（山口・広島・岡山）地域」の
研究成果報告書

北尾浩一

(1) 瀬戸内（岡山県・山口県）で確認された「日本固有の星名」に関する天文民俗学的
データ

はじめに

広島市こども文化科学館（広島県広島市）において開催された東亜天文学会広島年会において、「星の和名形成と瀬戸内海」について発表を行なった。また、それをもとに、広島市こども文化科学館加藤元館長等から広島市南区の漁港についての情報を入手した。その結果、広島県南区には、伝承者が既に亡くなられてしまい、調査が不可能であることが判明し、山口県と岡山県の調査に重点をおくことにした。

① 山口県防府市野島

2012年に実施した際に不在であった野島の伝承者のA1さん（昭和7年生まれ、野島出身）を訪ね、星を歌った俚謡の映像、音声記録を行なった。（A1さんについての映像記録及び録音の聞き取りは古屋昌美氏担当）（写真右、野島の港）



●新しい和名

ゴンタロウボシというアルクトゥルスを意味する可能性の大きい和名を記録した。話者に次のような聞き取り調査を行なった。（K：北尾、W：話者A1さん）

K「明けの明星のことを地域地域でいろんな名前があるんですけど、ここはどういってました？」

W「うちのほうではなんですか、5月に宵の明星の金星よりも別に金星の後、木星が良く輝くんです。それをゴンタロウボシというんです」

一般的に明けの明星は話者にとって馴染みの深い星であるので、まずは明けの明星から確認しようと思ったが、想定外に、宵の明星及びその後に見える木星について語りはじめた。そして、木星をゴンタロウボシと呼ぶという説明に驚いた。

K「ゴンタロウボシ？」

W「そのゴンタロウボシ、わたしが想像するにですねゴンタロウという御方がこの5月頃に野良仕事にかまけてから、こう星の灯りで仕事を…実質的にできるわけではないんですけどね。日が暮れても野良仕事をやめずに続けていたからゴンタロウボシ、木星のことですね。5月頃に、あの、宵の明星のあとに大きく輝くんです、5月頃に」

K「北尾：宵の明星のあとに？大きく輝く？5月頃に？」

話者が木星と言ったことが疑問であり、誘導尋問にならないように注意しながら、確認をする。

W「そうそう。大きく輝く星。うちの方ではほとんど旧暦の5月に麦刈りをやっていた」

K「その季節に。忙しい麦刈りの時期に」

W「家に帰らずに、ずっぷりとっくり暮れるまでやっていた（麦刈りを）。明日が雨というような特別なときには我々もやらされたものですよ」

K「宵の明星がしずんで、ゴンタロウボシというのはまだ輝いている？」

W「そうですそうです、宵の明星のあとにこの大きな星が。5月ごろに真上にある。ですから田植え唄にもそういうふうなのが昔の屋号で上の部屋という。今の上の部屋でなく昔のほんとうの上の部屋というのがわずかに田んぼがあったんでしょうね」

K「ゴンタロウボシがでてくる？」

W「そのおうちの田植えというのがこの、あまり田んぼはひろくないのに陽がとっぷり暮れても、田植えが済まなかったという。ですから、『上のへやの田植えには、二言まったく行（ゆ）くまいぞ。七つ止め（北尾注：七つは午後4時のこと。七つ止めは、午後4時に終わること。午後4時に仕事が終わるかと思えば、ゴンタロウボシが見えるまで仕事が続いたという意味）かとおもうたらゴンタロウボシをおがませた』というこういう文句があるんですね。それがうちの田植え唄に歌われていたらしいです。田植え唄の元唄というのが本当はあるんですが。元唄だけでは文句が足りないというので島ではいろいろ作っては歌っていたんですね」

K「聞かせてもらっても？」

W「♪やーれ 代（しろ、北尾注 田のこと）もよーい 苗（なえ）もよーい この田にやこーめ（米）が千石（せんごく）ぞう 千石米（せんごくごめ）ならまいたまきだね 万石（まんごく）できたら嫁とろうに～これが元唄ですね。『万石できたら嫁を取ろうに』という。その歌ばかりではあまり早乙女さんの手が動かないってんで女の腰まわりの歌のほうがよく出ていたんですね」

K「ゴンタロウボシも出てくる？」

W「ゴンタロウボシはいまの節でやってみましょうかね。♪やーれ、うーえのへーやの田ー植えにーは 二言全くゆくまいーぞー ななつやめかとおもうたらーば ゴンタロウボシをおがませーた あんまりやったことないので…もう一度やってみましょうか」

W「ああいう風に…言葉はいまあなた方にわかりやすいように歌わしていただいたけど。『ゴンタロウボシ』を『ゴンタロウボシヨ』をと発音してたんですよ」

K「やれ、上のへやの…？」

W「上のへやの田植えには、二言…二度と再び行くまいぞ、ですね」

K「上とは山の上？」

W「いや、上というのは屋号でそれがマツモト。うちに七件（七間？）かぶ八件（八間？）か

ぶといわれている。ニシヤマとかイシマルとかマツモトとかコジョウとか。マツモトの総本家が上。上下の上。総本家のへや（部谷？）になるから『うへのへや』

K「そのひとの田んぼにはいかないということ？」

W「田植えには…七つ…午後4時の事ですね。午後12時が九つ、八つが2時。午後4時頃には終わるか。思ったら、ゴントロウボシが見えるまで…ずんぐり暮れる午後7時すぎまでかからされた、だから行くまいと」

K「確かに5月くらいに明るい星が見えますね」

W「あなたがたは見られたことはないですか？」

K「あります」

W「あれをうちのほうではゴントロウボシと。5月、夏の初めころに明るく輝く。あれが木星だということも知らずに、うちのほうではゴントロウさんが、いつもその星が輝くまで仕事をしていたから、ゴントロウボシとうちのほうではあだ名がついたんでしょうね」

K「ゴントロウボシにほかの呼び名は？」

W「ないですね。ですから木星だということも、わたしもついこの数年前頃になぜあの星がゴントロウボシなのか、なんという星なのかも調べずにわからずに聞き流していたのですが、どうしても、そのゴントロウボシというのがどういう星なのかと、星座の本をちらっとみて、あれがああ、木星だなとわかったくらいで。唄は若い頃からずっと聞き流していたから」

木星というのは、A1さんの後の知識で加わったものであった。「宵の明星のあとにこの大きな星が。5月ごろに真上にある」というA1さんの説明からアルクトウルの可能性があると推測していたが、誘導尋問にならないように注意しながら確認をする。

K「ムギボシというひとはいなかった？ 麦を刈るころに見えたから」

W「うちのほうでそれはいわなかったですね。ゴントロウボシ。仰る通り5月の麦の取入れの頃にありますが。うちのほうではそれをゴントロウボシ。しょっちゅうゴントロウさんと言うひとが野良仕事に…」

古屋氏のほうから、「明るくて、明るい星で色はわかりましたか？」と確認すると、A1さんは、「色というのが…ごくごく明るく輝いて。花火が明るく輝いてマグネシウムを燃やしてまず青く光り輝くような…木星はね。わたしの乏しい知識からいうと質量はかなり軽いというか低いように…」という答えが返ってきた。なかなか、星の色は正確に表現できないケースが多く、アルクトウルのオレンジ色を「青く光り輝くような」と表現しているのは気になるが、花火が明るく輝いてという比喩とは矛盾していない。

●流星

W「流れ星やなんかはあまりないですが、流れ星がながれはじめてからきえるまでに「ジソロバンジソロバン」と言うのを唱えたら…字算盤、字と算盤と。が上達するんだという言い伝えがあってジソロバンジソロバンと言われたものですよ」

古屋氏が、「それは何回唱えるんですか？」と確認すると、「3回以上。流れ星が消えないうちに3回以上唱えると必ず字算盤が上達する。読み書き算盤の時代のときから。流れ星が

消えないうちに。聞かされたことがある。子どものころ体験がある」という答えが返ってきた。

●スマルの俚謡

A1さんは、次のように伝えていた。

「♪ちよいと言うてみましょ 音頭出したが やしごよ たのま
天はひろいのに すばるぼしゃ ごじょごじょ
海はひろい…間違えましたごめんなさい…海はふかいのにエビのこしゃまがる
…ってその繰り返しです。それから、あの、そのまぐら言葉がすんだら本題にはいるんですね。あの、たとえば「鈴木主水（すずきもんど）」とか「忠臣蔵」とか、忠臣蔵の文句をちょっとやってみましようか？」

もう一度、歌ってもらおう。

「♪あ————、音頭、ちよいと言うてみましょ 音頭だしたがなんどいうたものか
天はひろいのに すばるぼしゃごじょごじょ 海はふかいのにエビのこしゃまがる
これは音頭のまぐらのことば されば これから 文句にかかる
うけし恵みは山よりたかく 鳥の毛よりも我が身はかろし 雪もうらみも積もりしやうち
主の敵をうちかえしたる 今に 忠義の名もたかなわの むかしょかたらん いざききた
まえ…これから私流の字余り音頭がはいります」

7年前に調査を実施したときにA1さんは不在だったが、A2さんから聞いたのは、「家は広いのにとつとかっかはごじょごじょ」と言うのが加わっていた。A1さんは、そのように歌わなかった。歌う人、歌うときによって、多様に変化することについて、次のように語った。

W「そうですそうです…節も、わたしの節よりほかの方が口説く節も結構ちがうのがあります。基本はああいう風になっておりますけれども口説く御方によってずいぶんいろいろ節は変わる」

●北極星—ネノホシ

北極星のことを子の星と、十二支で表現する和名は広く伝えられている。

W「北極星のことをネノホシと。かわらないからネノホシという。あれを中心に地球はまわるので、あれは朝から晩まで…日が暮れてから夜が明けるまで変わらない。だからネノホシ…根本の星（根の星）。木の根の根です。あれを根本に地球はまわるんだと。学はないなりに昔の島の漁師はこころえていた」

しかし、A1さんは、ネノホシを子の星でなく、根の星と伝えていた。伝承の過程で合理的に納得できる形に変容した事例である。

大分県姫島からの帰りは、次のようにネノホシを目当てにした。

W「漁場に行くときには明るいうちに…午後3時頃に姫島へむかって。明るいうちは姫島が見えますので。星もなにもたよりにしなくていい。そのかわり、夜明けに午後（午前の間違い？）3時から4時ころになって（網を）あげて帰るときには羅針機もコンパスもなにもな

いから、ネノホシに向かって（帰る）。そういう風なやりかたで。北極星に向けて帰ればだいたいこの島にたどり着く」

●オリオン座三つ星ーカセボシ

W「オリオン星座をうちのほうでは、カセボシと言った。カセボシは、こう水のはいるところが大きくて持つところが小さくて」

古屋氏が星座で確認したところオリオン座三つ星と小三つ星と η を意味した。

（写真右 オリオン座三つ星と小三つ星、 η 星で構成する配列をカセボシと呼んだ）



また、前は音声のみしか記録できなかったA2さん（昭和6年生まれ）の映像記録を行った。

② 岡山県岡山市南区小串

未調査地域である小串で星名伝承の記録を試みたが、漁師がほとんどいなくなっていた。港で出会った人の父親が80歳を超える元漁師であったが、定置網を生業としており、星名伝承を伝えている可能性は低いと判断し、次の調査地へ向かった。（バスの本数が少なく2か所調査のためには時間の制限があった）



（写真右 小串の港）

③ 岡山県倉敷市下津井5丁目（大室漁港）

未調査地域である大室漁港の調査を実施した。B1さん（昭和12年生まれ）は、ヨアケボシ（明けの明星）、スマルボシ（プレアデス星団）を伝えていた。特筆すべきは、ヨアケボシを方角を知る目標にしていたことである。（写真右 下津井の港）

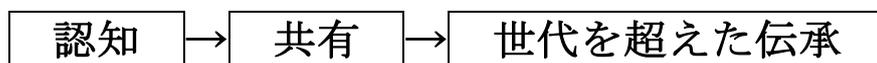


（2）調査データから、今回の科研の目的に沿った天文民俗・天文考古および認知天文学的な分析・考察

①星の俚謡の多様性についての分析・考察

星の形状、明るさ等を認知する。ただ、認知するだけではいけない。また、その段階にとどまれば文化形成までなされたとは言えない。次のように、地域で共有され、場合によって

は、地域を越えて空間的に伝播し、さらに世代を超えて伝承されるというプロセスを経て、時間的、空間的なひろがりのある文化として形成される。



そのプロセスの進行にあたって、俚謡というものは、「共有」「伝播」「世代を超えた伝承」の力となる。

北尾が2012年に福武財団の研究助成を受けて実施した野島のA2さんの伝えていた次のような俚謡とは異なったものを記録したが、その異なるという多様性こそ、ひとりひとりの言葉で歌った証拠であり、単に受動的に記憶するにとどまらない「共有」「伝播」「世代を超えた伝承」を担保する要因となる。

楽譜 野島の星の歌 採譜者 北尾正子

あー スマシマンズク
はやよはたつ
2んのひろいのに
スマルボシゴジゴジよ
うめのひろいのに
エビのニシヤカニシタ
いへのひろいのに
トトセカカカゴジゴジよ

楽譜 2012年にA2さんより記録した俚謡

②方角を知るために必ずしも北極星を目当てにしないことについての分析・考察

ともすると、次のような誤解をされることがある。

- ・方角を知るために使用する星は北極星（こぐま座 α 星）である。
- ・瀬戸内海は、島がすぐ近くに見えるので、方角を知るために星を目標にする必要はない。
しかし、本調査では、次のような伝承資料を記録することができた。
- ・濃霧のために星は見えても下のほうの島が見えないことがあり、そのときは星が目標となった。
- ・北極星だけを目標にするのではなく、ヨアケボシ（明けの明星）が東に見えることからヨアケボシを東と頭に入れて方角を決めたこともあった。

(3) 今後の研究への発展と課題

星を人間が認知する。名前がなくても目標にする。やがて、名前をつける。その各プロセス、構造を解明していくにあたって、瀬戸内海地方は重要な位置を占める。

日本の星名伝承形成にあたって、瀬戸内海という夜間でも比較的安全に漁ができる環境に恵まれた地域があったことを忘れてはならない。瀬戸内海は、1937（昭和12）年5月15日～20日、宮本常一氏、澁澤敬三氏、磯貝勇氏、岩倉一郎氏をはじめ17名により調査が行なわれ、アチックミュージアム『瀬戸内海島嶼巡訪日記』（1940年）にまとめられている。瀬戸内海の星名伝承については、先行研究が唯一豊富な地域であり、さらには今日においても多様で豊かな星名伝承の記録が可能な地域である。それだけに、瀬戸内海は、星を認知し文化を形成していく構造解明に必要な幅広いフィールド記録、多数のデータがあるという意味で調査研究のポイントとなる。

東北から南西諸島に渡る星名伝承の研究、していは星を認知し、文化形成に至る構造の解明にあたって、瀬戸内海の調査をさらに続け、データを蓄積していくことが必要である。

.....

（話者名一覧表・・・個人情報につき取り扱い注意）

A1：西山森作さん、昭和7年生まれ、野島出身

A2：西山ミサエさん、昭和6年生まれ、野島出身

B1：難波肇さん、昭和12年生まれ、下津井出身